

はじめに

教育学部教育改善委員会委員長 浅野陽樹

教育学部では、講義の質や教員の教育能力を高めて学部教育の充実を図るといった目的で授業アンケート等の様々な活動に早くから自発的に取り組んできましたが、本年度の活動を通して、大学の管理運営上の役割という別の点からも本委員会の重要性が増しているように感じています。その背景には、全学のFD委員会において平成31年2月の中教審の資料を基に説明があったように、FD活動が教学マネジメントを支える基盤として明確に位置付けられたことがあります。そのため、FD活動の成果を様々な評価のエビデンスとして使用すべく、FD活動への教員の参加率、各種アンケートの回答率、またアンケート結果の分析が求められました。

終わってみればこのような状況でしたが、本年度の活動内容は前年度の活動を踏襲する形で計画しスタートしました。主なトピックスは、授業アンケート、授業公開、学部・研究科合同FDシンポジウム、教育改善に関する調査研究（学生FDサミットへの参加）、研究科の教育改善アンケートです。詳しくは第一部以降の報告に譲ります。その他の活動として、ここでは教育改善の方法・方策を取り扱った講演会とベストティーチャー賞の選考方法検討について簡単に紹介したいと思います。

【教育改善の方法・方策を取り扱った講演会】

不登校学生への対応として、前半には不登校になる際の心理的な背景と支援方法・関わり方について、後半には不登校から復帰に向けての支援方法について以下の通りお二方にご講演をお願いしました。

○前半：9月17日（火）13時～

講演者：関山 徹 先生（教職大学院）

演 題：無気力状態に陥った学生の理解と対応

○後半：10月15日（火）13時～

講演者：伊地知 信二 先生（保健管理センター）

演 題：学生支援の原則と課題

いずれのご講演も、全教員が身近な問題として感じている重要な内容で有意義だったと思われま

【ベストティーチャー賞の選考方法】

この話題は、教員表彰制度が「業績を適正に評価する指標」として進められていることからあえて紹介します。前年度に制定したばかりの規約の改訂を検討した理由は、ベストティーチャー賞に関する全学的な判断基準が示されたことと教職大学院の専任教員が受賞選考

の対象に含まれていなかったことに対応するためです。この規約の改訂と選考方法について多くの時間を割いて議論しました。

また、今年度は文科省の「全国学生調査」が実施され、翌年度には学生から見た各大学の教育に関わる具体的な状況が学部ごとに公開されます。教育学部の皆さまには、鹿児島大学の参加する IR コンソーシアムアンケートの回答率の向上にご協力頂きましたことをこの場をかりて御礼申し上げます。このような調査と情報公開は、先述したように学部の様々な評価につながることから、学部の授業アンケートの回答結果とそれに対する実質的な改善が今後ますます重要になることは間違いないようです。

以上、本委員会の活動の重要性が今後ますます高まる中で、本年度の活動内容が今後の学部教育の発展につながることを期待して、以下に活動の詳細を報告します。

目 次

第一部 鹿児島大学教育学部の教育改善に関する活動報告

1章 授業アンケート回答の分析

1 実施方法	1
2 質問項目	1
3 結果	2

2章 令和元年度教育学部授業公開報告

1 授業公開の実施計画	3
2 授業参観の実施状況	3
3 授業参観報告書における記述（一部を抜粋）	4
4 授業公開に関するまとめ	4

3章 教育学部・教育実践総合専攻合同 FD シンポジウム

1 開催の趣旨	5
2 シンポジウムの概要	5
3 学生 FD 委員会からの趣旨説明と問題提起	5
4 グループ討議と全体での共有	6
5 全体のまとめ	6
6 今年度の成果と今後の課題	7

4章 学生 FD サミット 2019 夏 with 学生 FD 会議

「大学はつまらない？～ 今、私たち学生にできることは～」in 北翔大学

1 引率教員報告	8
2 参加学生報告 ～ 学生 FD サミットに参加してみて ～	11

5章 学生 FD 委員会の活動

1 学生 FD 委員会の概要	14
2 各班の活動と振り返り	14
3 今年度の成果と今後の課題	16

第二部 鹿児島大学大学院教育学研究科の教育改善に関する活動報告

1章 令和元年度教育学研究科教育改善のための調査

1 はじめに	17
2 調査の実施方法	17
3 結果と考察	17
4 おわりに	21

編集後記	24
------	----

1章 授業アンケート回答の分析

1. 実施方法

令和元年度の授業アンケートは、前期及び後期の学部開講授業科目について、担当教員1名につき1科目を選択し紙媒体にて実施した。実施期間は、前期は令和元年7月16日～8月2日、後期は令和2年1月22日～2月5日に行った。また、実施教員へのフィードバックは、学科事務を通して紙媒体にて返却を行った。

また、昨年度同様質問項目12は、ベストティーチャー賞候補者選出に際して評価する数値として位置付けた。

2. 質問項目

質問項目を表1に示した。

表1 授業アンケートの質問項目

1	授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか？
2	授業中は能動的に学ぶことができましたか？
3	授業内容は理解できましたか？
4	第1回から最終回までの授業を体系的に理解することができましたか？
5	シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか？
6	教師の説明は分かりやすかったですか？
7	資料（板書，プロジェクター，配布資料等）の内容は授業の理解を助けるものでしたか？
8	授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか？
9	授業時間外に教師に質問をしましたか？（オフィス・アワーやメール・manaba上での質問も含む）
10	この授業について毎週平均で何時間くらい予習・復習をしましたか？
11	授業はあなたの興味関心の増大や知識の獲得など，自分にとって得るものがありましたか？
12	授業は全般的にみて満足するものでしたか？
13	この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。

質問1、5については、（そう思う、だいたいそう思う、あまりそう思わない、そう思わない、わからない）、質問2～4、6～8、11及び12は、（そう思う、だいたいそう思う、あまりそう思わない、そう思わない）、質問9は、（はい、いいえ）の何れかを回答し、質問13については、自由記述とした。

3. 結果

表2 質問項目の平均値

質問項目	R1 前期	R1 後期
1	3.44	3.44
2	3.43	3.36
3	3.26	3.34
4	3.29	3.73
5	3.02	3.02
6	3.52	3.52
7	3.49	3.52
8	3.24	3.28
9	0.11	0.18
10	1.29	1.42
11	3.41	3.43
12	3.46	3.48

質問項目1～12の平均値を表2に示した。質問項目3、4、7～12において、前期より後期の方が高い値を示した。質問項目2の「授業中は能動的に学ぶことが出来たか」においては、前期より後期の方が低い値を示した。質問項目1、5、6においては、前期と後期同じ値を示し変化が見られなかった。

質問項目13の自由記述においては、「子どもと触れ合う機会や模擬授業があつてよかった。」、「授業での目標を達成するためにどういった手順で授業を行うと児童が十分理解するかしっかり考えてこの授業を受けれたと思う。先生が直接子どもたちに説明して学ばせるより児童が自分たちで気づいて考え目標を達成できる授業を展開していきたい。」、「とにかく先生の人柄が良かったので、発言もしやすく能動的に学ぶことができました。」など前期後期ともに授業に関する良い点を記入したものが多くみられた。

しかしながら、授業の改善点についても以下のように幾つかの記載があつた。「すごく難しすぎる内容だったので、もう少し簡単にしてほしいと思う。」、「話すだけでなく、板書等をしてほしい。」、「講義を時系列順に整理し、流れをわかりやすくしてほしい。重要点を示してほしい。」、「テストの難易度が高い。」、「授業中に質問できるのはよいが、教室で声に出して言いづらいのでmanabaなどで質問を受け付けてほしい。」などが挙げられた。今回の結果より、個々の教員が授業に対して不断の努力を重ねる事の重要性や学生の「能動的学修推進」に向けた取組みが今後の課題の一つである事が示唆された。

2章 令和元年度教育学部授業公開報告

1. 授業公開の実施計画

(1) 授業公開の目的と枠組み

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針にある FD の定義には「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上をはかるとともに、学生支援を行う自発的な取組」とあり、各教員が自発的に自身の教育方法を向上・改善させて行くことが求められている。また、本学部の教育改善委員会においても「教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指す」ことを目的として設定し、今年度も授業公開・参観を実施した。

なお、授業公開にあたっては教職大学院と連携し、学部・大学院の全教員が両方の授業を参観できるようにした。

(2) 授業公開の実施手順

昨年度と同様、都合により公開できない科目の調査を行い、それ以外の科目はすべて、授業者への事前連絡なしで参観できることとした。加えて、新任教員には前期のみ、個別にメールで授業参観の呼びかけを行った。

(3) 授業公開不可科目調査

事前に教授会で実施手順について説明したのち、前期は6月19日(水)～26日(水)、後期は11月18日(水)～27日(水)の期間で授業公開不可科目の調査を行った。調査内容は、公開不可科目の曜日・時限・科目名と参観者を受け入れられない理由であった。

調査の結果、前期は3名から6科目、後期は2名から2科目が公開不可科目として届けられた。参観者を受け入れられない理由は、ゲストティーチャーの講義、スペース不足、受講生に対するプレッシャーへの配慮、等であった。

(4) 授業公開不可科目一覧と授業参観報告書書式の提示

授業公開不可科目調査の結果と授業参観報告書の書式を全教員宛にメール添付で送信した。

授業参観の対象は授業公開不可科目一覧に記載されている授業と教職大学院の実習科目を除くすべての授業とし、授業参観後に授業参観報告書の提出を求めた。

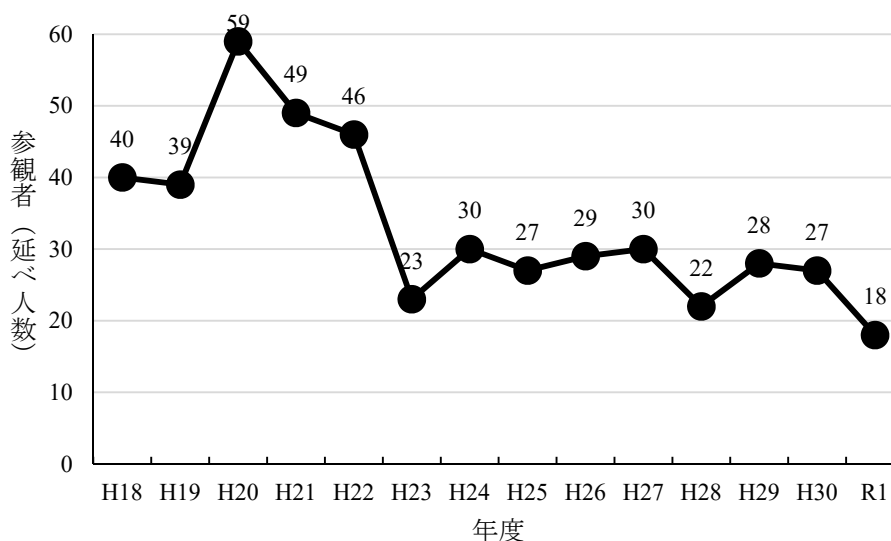
(5) 授業公開および授業参観の実施

授業公開は、前期は7月1日(月)～12日(金)、後期は12月2日(月)～13日(金)の期間に実施した。

2. 授業参観の実施状況

学部教員76名(特任教員を含む)、教職大学院教員13名のうち、前期は13名14件(前年度18件)、後期は4名4件(前年度11件)の報告書が提出された(教職大学院の教員が教職大学院の授業を参観したものを除く)。参観報告書の提出数は過去最低となったが(表3)、学部教員が教職大学院の授業を参観したものは6件(33%)あった。教職大学院は授業を常時開放しているが、学部の授業参観期間を活用して教職大学院の授業を参観した教員が一定数いたようである。学部・大学院改革の一環で教職大学院の授業を担当するにあたり、その準備として一定の役割を果たしたものと考えられる。

表3 授業参観者数の推移



3. 授業参観報告書における記述（授業方法に関する部分を中心に一部を抜粋）

- 抽象的な理論を述べるだけでなく、教員自身が経験した現場でのエピソードなど、具体的な実体験を例に出し説明されていたので、学生にとってわかりやすい内容となっていた。
- 学生に対して頻繁に質問を投げかけることで、学生に考えさせる機会と意見を述べさせる機会を与えていた。また学生の意見を否定せず、まずは受け入れることで意見を述べやすい環境が作られていた。
- 模擬授業担当学生に授業の中で課題を与え、考えさせており、担当学生も積極的に動き、アイデアを出していた。ただ単に学生に参加させるだけでなく、如何により良い授業にするか共に考えさせており、参考になった。
- 受講生に自由に発言させる雰囲気や的確な助言の内容・タイミングなど、自身の授業改善に役立てたいと考える。
- 課題レポートを manaba で出しているとのことで、ICT も活用した取り組みは大変参考となりました。
- 発表内容や指導内容を受けて、受講生間での突っ込んだ意見交換、改善点の指摘やそれに対する反論の時間を設けられれば更に良いと思われた（時間の都合もあると思うが）。

4. 授業公開に関するまとめ

専門が異なれば授業内容も異なるのが当然であるが、「よい授業」に共通する方法はある。今回の参観報告書からは、よい授業に普遍的な特徴のいくつかが垣間見えた。参観報告書からも他の教員の工夫や熱意を感じ取り、自身の授業に取り入れようという意欲的なコメントが多く寄せられた。

よい授業とは何かを考え、自身の授業を見直すきっかけとして、授業参観を役立てていただければ幸いである。参観者が少ないというのは数年来の課題であり、この課題をいかに克服するかが当委員会に残された宿題である。

第3章 教育学部・教育実践総合専攻合同FDシンポジウム

1. 開催の趣旨

教育学部・教育実践総合専攻合同FDシンポジウム（以下、シンポジウムと略す）は、教育改善委員会が学生FD委員会と共同で開催するシンポジウムである。シンポジウムの主たる目的は以下の2点である。

- (1) 教育学部および教育学研究科教育実践総合専攻における教育活動を改善するための知見や方策について、学生と教職員で共有すること
- (2) 共有した知見や方策を文書等として蓄積し、実際の改善に活用すること

上記の目的を達成するため、本シンポジウムでは、学生の視点から出された不満や疑問点などを出発点として、学生と教職員が対等な立場で意見交換を行うことを趣旨としている。

2. シンポジウムの概要

今年度のシンポジウムは以下のとおり開催された。

- ・開催日時 2019年12月10日（火）5限（16:10から17:40）
- ・会場 第2講義棟 講義室B
- ・テーマ よりよい授業を作るには―学生と教職員の役割を考える―
- ・参加者数 18名（学生10名、教員8名）
- ・当日の流れ
16:10 - 16:15 開会あいさつ（教育改善委員会委員長 浅野先生）
16:15 - 16:25 趣旨説明（学生FD委員会シンポジウム班班長 平山さん）
16:25 - 17:20 グループ討議
17:20 - 17:30 全体発表
17:30 - 17:40 全体のまとめと閉会あいさつ（教務委員会委員長 藤田先生）

3. 学生FD委員会からの趣旨説明と問題提起

昨年度のFDシンポジウムでは、「学生と教員がともに考える学び―作れ、新しい授業のカタチ―」をテーマとして、学生・教員それぞれにとってのよい授業のあり方や、それをどのように実現するか等について、グループディスカッションを通して考えの共有を行った。そこでの議論を踏まえ、今年度のシンポジウムでは、より焦点を絞り、かつ具体的な手立てなどについて考えることができるよう、「学生の家庭学習」をテーマとした。

はじめに、学生FD委員会からの問題提起として、以下の点が紹介された。

- ・大学設置基準や鹿児島大学学則等により、1単位当たりの学習時間数は45時間であると定められている。
- ・教育学部の授業時間が30時間（15回×みなし2時間）であることから、1単位科目については毎週1時間、2単位科目については毎週4時間の家庭学習が必要である。
- ・昨年度の授業評価アンケートの結果から、毎週平均の家庭学習時間が1時間から30分程度であり、特に講義科目における予習・復習時間の確保が課題である。

- ・その他、学生からは、グループワークでの課題（宿題）では、異なる学科のメンバーで集まることが難しい、グループ内での負担感の差が感じられる、成績・評価がどのように行われているかが不透明である、等の意見がある。

4. グループ討議と全体での共有

上記の問題提起を受け、はじめにワークシートをもとに各自の考えを整理する時間を設けた。学生用のシートには、具体的にどのような授業でどのような課題が出されていたか、どのくらいの時間を家庭学習に費やしているか、グループ課題に対してどのように考えているか等の項目が、教員用のシートには、それぞれの授業でどのような課題を課しているか、またグループ課題を課している場合には、その意図等を振り返るための項目が用意されていた。

各自でワークシートに記入した後、4～5名程度のグループで討議を行った。各グループには学生FD委員が1名、ファシリテーターとして参加し、議論をすすめた。議論の内容や展開はグループごとに異なるが、いずれのグループについても、「家庭学習にかんする問題点や課題は何か」と「その問題点を解消・改善するための具体的な手立ては何か」という2点について議論をするように促した。

グループ討議の後、全体で考えを共有した。その際に出た主たる意見は以下の通りであった。

- ・グループ学習やグループ課題の意図や狙いが教員と学生の間で共有されていない。教員は、協同して課題に取り組むことで、多角的な視点や考えに触れることや、グループで協働的に取り組む力などを求めていることが多く、必ずしも分担を想定しているわけではない。
- ・シラバスで課題の内容や趣旨などを明記するとともに、初回のガイダンス等で説明し、理解を得る必要がある。
- ・グループワークだけで評価したり、それを全員の評価として採用することは稀であり、実際はグループワークを基にした個人課題などで評価していることが多い。
- ・グループでの貢献度をどのように測定し、評価するかが難しい。準備で貢献していても見えにくいのではないかという懸念がある。
- ・TA やSA のサポートがもう少しあるとグループワークがうまくいくのではないかと。
- ・そもそも課題がないと勉強しないということではないのか。
- ・課題をManaba から提出させることで、ポートフォリオとして一元化して蓄積できる。期末試験の前やレポート作成で振り返ったり、就活の自己分析などにも役立つ。多くの授業での積極的な利用を求めたい。

5. 全体のまとめ

最後に、藤田教務委員会委員長より、シンポジウムの議論の総括をいただいた。

グループでの課題や評価の方法などはある程度教員個人に委ねられているところもあるが(また、授業がすべて面白いという期待が妥当であるかどうか、という点も指摘があった)、シラバスの記載内容やその記述の充実については、教務委員会から各教員に要請を行うとのことであった。また、学生FD委員会の活動について、学生目線で、大学や学部に訴えるようなテーマや議論をして、要望書等として挙げてもらいたいとのことであった。

6. 今年度の成果と今後の課題

最後に、出席者（学生10名、教員8名）から回答を得たアンケートの結果を報告する。

現在の家庭学習状況の認識（項目1、2）について、学生の認知度が高いのは、今回のFDシンポジウムの参加者の多くが学生FD委員であり、事前にこれらの事項について共有していたためである。一方、教員のほうでは、項目1に1件、項目2について1件、「いいえ」の回答があった。これらの事項については、シラバスの作成における家庭学習欄の記載や授業評価アンケートの結果が十分に周知されていないことを示唆する。

家庭学習の分量（項目3、4）について、平均としては、学生・教員ともに、課題の量が多いとは感じておらず、また学生は、自身の学習時間を短く感じているようであったが、どちらの項目についても、回答のばらつきが大きいようであった。個々の授業における課題の質と量については、各教員の裁量に委ねられているところが大きく、ばらつきがあるのではないかと考えられる。

シンポジウムでの議論について（項目5、6、7、8、9）の数値はいずれも高く、充実した議論ができたと考えられる。とりわけ、例年シンポジウムの課題として挙げられていた「議論が具体的でない」という点については、家庭学習というテーマに絞ったディスカッションを行うことによって、参加者にとって満足のいく議論が可能となったのではないかと考えられる。

表4 FDシンポジウム事後アンケート結果

項目	学生 (n=10)		教員 (n=8)	
	はい	いいえ	はい	いいえ
(1) 1単位につき45時間の学習という考え方について知っていましたか	5	5	7	1
(2) 家庭学習時間の平均がおよそ30分から1時間であることを知っていましたか	8	2	7	1
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
(3-1) あなたは自分の家庭学習時間が少ないと感じていますか (学生のみ)	3.20	0.63	--	--
(3-2) あなたは学生の家庭学習時間が少ないと感じていますか (教員のみ)	--	--	2.88	0.99
(4-1) あなたは教員が出す課題の量が多いと感じていますか (学生のみ)	2.50	0.71	--	--
(4-2) あなたは自分が出す課題の量が多いと感じていますか (教員のみ)	--	--	1.75	1.04
(5) グループディスカッションにおける議論は、有意義でしたか	3.90	0.32	3.75	0.46
(6) グループディスカッションにおける議論は、具体的でしたか	3.90	0.32	3.75	0.46
(7) グループディスカッションにおける議論に、積極的に参加できましたか	3.70	0.48	4.00	0.00
(8) グループディスカッションを通して、教員・学生の考えを理解することができましたか	3.80	0.42	3.88	0.35
(9) グループディスカッションを通して、自分の考えが深まったり変化したりしましたか	3.80	0.42	3.88	0.35

注. 項目1、2は「はい」・「いいえ」の回答者数、それ以外は4件法（4: とてもそう思う ~ 1: まったくそう思わない）による回答の平均値と標準偏差

4章 学生FDサミット2019夏 with 学生FD会議

「大学はつまらない?～今、私たち学生にできることは～」in 北翔大学

1. 引率教員報告

委員会の目的である教育改善に関する調査研究のため、2019年8月27日（火）、28日（水）の2日間にわたり北海道江別市の北翔大学において開催された学生FDサミット2019夏 with 学生FD会議「大学はつまらない?～今、私たち学生にできることは～」に学生2名を帯同して参加しました。

比較的涼しく小雨の降る中開催されましたが、会議全体を北翔大学の北翔アンビエントという学生グループが運営し、総勢45大学238名（教職員49名、学生189名）の参加という学生サミットとしてはかなり規模の大きな熱気ある会議だったように思います（写真1）。

会議は、1日目午後の受付を済ませた後、まず「学生FDの父」と言われる木野茂先生の挨拶を含むオープニング、次いで各大学の活動を紹介するポスターセッション、情報交換会と続き、2日目は、午前中に会議タイトルのテーマについて班ごとに議論するしゃべり場、午後には各班の議論内容を共有する発表会とクロージングという内容で構成されていました。以下、セッションごとに報告します。



写真1 メイン会場

【オープニング】

当然ながら学生の司会進行で進められましたが、司会、周りのサポートまた映像等から学生の熱意が十分に伝わってきました。参加校紹介では大学の魅力をアピールしました（写真2）。また、学生FDの父と呼ばれる木野先生からは、学生FD立ち上げのお話と学生へのエールが送られました。そして、驚くべきは、文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室の担当者による「全国学生調査」の実施についての説明が組まれていたことでした。これは運営側の働きかけではなく、文科省から依頼があったということで、説明では学生の声が大学に届くということが強調されていました。



写真2 鹿児島大学紹介

【ポスターセッション】

鹿児島大学を含めて22大学がそれぞれの取り組みをまとめたポスターを掲示し、2時間じっくりと情報交換しました（写真3）。学生は、ポスター前での説明者と他大学の情報収集者とで交代しつつ、初対面にも関わらず積極的に熱く話っていたのが印象的でした。以下、いくつかの大学の取り組みを紹介し



写真3 ポスターセッション

- ・SAの積極活用（嘉悦大学）

授業のアシスタントを担うSAを組織化しており、定期的な全大会議にて、教育改善につながる事項、例えば教員に教育改善方法を提案したりといった企画を立案したり、SAの昇給（時給1,950～3,000円）を決定したりしている。

- ・入学当初のピアサポート（神奈川大学）

入学前ガイダンスや入学当初期において学生が新入生の学生生活全体をサポートしている。

- ・学生から教員への提案

レポート書き方講座を依頼している（九州工業大）

学生が受けたい授業を企画し専門の近い教員と相談の上、新設科目を開講している（日大文理学部）

コミュニティスキルの指導を依頼している・教員は協力的である（中京学院大短期大 学部）

- ・教員紹介一覧の作成

教員紹介冊子（島根県立大など）や教員図鑑（下関市立大）を作成し配布している。

【情報交換会】

ポスターセッションの流れのまま、同じ会場にて開催されました。未成年者の参加もあるためノンアルコールの会でしたが、ポスターセッションの延長の雰囲気が残っていたためか、学生間や教職員間で活発な情報交換がなされました。話題はポスターセッションの内容から大学生活まで幅広く、ここで親睦を深めて翌日のしゃべり場につなげる意図が成功していたように思います。



写真4 情報交換会の様子

【しゃべり場】

参加者238名を、概ね学生5名・教員1名・職員1名の計28班に分け、各自昼食持ち寄りにて10時から13時半まで話し合い活動を行いました（写真5）。

テーマは「大学ってつまらない？」という教員の立場からするとセンセーショナルな問いかけでしたが、筆者の班では議論がその問いに終始しないよう、問いの先の自分たちにできることに進むよう、また学生主体で進むよう議論を方向付けました。ほかの班でも状況に応じて教員側が議論の焦点を誘導しているものと思われました。自己紹介後、「しゃべり場の進め方」資料に従って、大学に対して感じていることを共有し、大学は「つまらない」か「つまらなくない」かについて班の意見を決定した後、発表準備として模造紙に内容をまとめるという流れで進めました。

学生を持つ大学のイメージは、「授業が一方向的でつまらない、アクティブラーニングの授業は楽しい、内容が難しすぎる、難しい授業について学生同士の勉強会が開催されて良い、授業中にのびタイムを設ける教員の工夫が有難い」等であり、また問題点に対しては改善したいが方法がわからないといった学生の思いが印象的でした。



写真5 しゃべり場の様子

【発表会・クロージング】

話し合いの内容をまとめたポスターを活用した発表会で意見を交換しました。発表会は7班1会場で行われ、最後はメイン会場に全班のポスターが掲示されました。メイン会場では意見交換の時間が設定されていたわけではありませんでしたが、ポスター前で積極的に意見交換する姿がみられました。



写真6 発表会の様子

以上、全体を通して最も強く感じたことは、いずれの大学にも教育改善に意欲の高い学生が相当数おり、教員の関わりがなくても（ないほうが）面白く有意義な取り組みをしているということです。鹿児島大学にも同様の学生が相当数いると思われ、そのような学生FDにつなげるためには、学生主体の組織化が課題といえます。この課題は以前から本委員会でも指摘されており、その体制作りに向けて進めておりますが、本調査を終えて本年度の成果にますます期待を寄せることとなりました。また、学生FD委員に対しては、各大学の様々な取り組みを参考にしつつ、またその活動の輪を全学へと広げて積極的に取り組んでほしいと思います。

2. 参加学生報告 ～学生FDサミットに参加してみて～

(1) 報告者：教育学部 中等教育コース技術科 2年 松木菜那

私は、北翔大学で行われた2019年度夏学生FDサミットに鹿児島大学教育学部学生FD委員の代表として参加した。去年の夏にも京都光華女子大学・短期大学部で行われた学生FDサミットに参加したため、大体の流れは把握していたが、ポスターセッションなどは初めてだったため改めて他大学の取り組みについて学ぶことができる良い機会となった。

ポスターセッションでは、鹿児島大学も同行した先生や先輩、FD委員の方にアドバイスを頂きながら他大学に仕組みや課題を伝えることができた。他の大学のポスターを見てたくさん質問などしたのだが、やはり鹿児島大学教育学部とは違い、サークルのような形でしている大学が多いため自主性が強いことに気づいた。他の大学の取り組みとしては、実際に授業を作り、提案したり教職員の紹介パンフレットを作ったり、しゃべり場を行ったりと特徴のある活動が多かったように感じた。私が鹿児島大学について紹介しているときによく言われたこととしては、「ソフトボール大会を自主的に企画し、教育学部内で親睦を深めていることはとてもいい」ということだ。しかし、改善点として「自主的に集めた方がいい」という意見や「教育学部内で絞らない方がいい」というような意見があった。この意見は、私もFD委員として活動している中でよく思っていたことだった。

今の鹿児島大学学生FD委員の現状として、先生からの推薦のような形で成り立っており必ず学科から2名は出すということで自主的になる人は少ないように感じる。このことから、途中で来なくなる人も少なくはない。この課題点は早急に解決しなければならないと考えている。また、鹿児島大学は教育学部内だけにとどまっているため、他の学部と共同になればさらに多くの意見を獲得することができ、視野が広がるのではないかと考える。

次に、しゃべり場では「大学はつまらない？」をテーマに話し合いを行った。様々な意見が上がったが、私たちのグループは「大学はつまらなくはない」という意見になった。様々な大学から学生や教員が集まったため、自分の知らないような他大学の現状について知ることができた。「大学は自由だから楽しい」「先生たちとの関わりが全くないからつまらない」などその大学によって学生の率直な意見を聞くことができた。逆に教員からは「学生との距離の縮め方が難しい」というような意見も上がった。普段は学生としての立場でしか生活をしていなかったため、教員側からのこのような意見は新鮮だった。このようにして、普段聞くことのできない教員からの意見を聞くことができることもしゃべり場の良いところだと考えている。鹿児島大学でも隔週火曜日の昼休みにFD委員で集まっているが、決まった人しか意見を出さず、あまり活発な意見交換ができていないように感じる。このことから、もっと教員と学生が意見交換できる場を増やした方がいいと考える。今回、FDサミットに参加して鹿児島大学の問題点や他大学の活動など様々なことを学ぶことが出来た。このことをこれからの鹿児島大学教育学部学生FDの活動で生かしていきたい。

(2) 報告者：教育学部 中等教育コース技術科 3年 横田美紅

2019年のFDサミットは北翔大学で行われ、鹿児島大学教育学部学生FD委員の代表として全国学生FDサミットに参加した。学生FD委員の仕事は、前年度に引き続いて参加している身ではあったが、前年度初めて鹿児島大学教育学部学生FD委員会に参加させて頂いたときには、「FD」という言葉も知らなければ、聞いたことすらなかった。何も分からないまま、活動に参加して徐々に知ることができた。また、全国FDサミットに参加するのは今回が初めてだった。鹿児島大学での学生FDの活動内容しか知らない身で、全国の大学ではどのようなFD活動が行われているのか全く見当がつかなかった。また、鹿児島大学FD委員会内の活動も大まかにしか分かっておらず、実際にどのような活動をしているのかを知っているだけで深くは知らなかった。今回、全国FDサミットに参加させていただけることが決まり、本校のFD活動について、改めて知ることができた。どのような人員構成で、活動を行っている状況なのかを、他の大学の人に伝えられる状態になることができた。

今回の北翔大学における「学生FDサミット2019夏 with学生FD会議」は8月27日と28日の2日間を通して行われた。この2日間を通しての全体の大テーマが「大学はつまらない？今、私たちにできることは」というものであった。大学生の中には大学を「楽しい」「面白い」「つまらない」と感じている人が様々だ。では、なぜそのような感じるのだろうかというところを、全国と同じ大学生の立場から考えていった。この学生サミットで教員も含めて学生と一緒にこのテーマについての原因を考え、共有することで全国の大学生がどのように変わっていけるのかを考えるきっかけになるものだった。実際にこの2日間では、このテーマについてグループに分かれて話し合う他にも、他の大学におけるFD活動について知ることができ、ポスターセッションというものがあつた。私たち鹿児島大学教育学部学生FD委員も実際にポスターを制作し、紹介することができた。まず、他の大学でのFD活動を知った感想としては、どの大学も学生が中心となって活動に参加しているということだ。学部で行うというよりは、サークルとして大学全体で行われていた。活動内容としては学生と教員とのしゃべり場を設け、飲食をしながらリラックスした環境で話をしたり、実際に単位認定された授業を作ったりであった。また、他大学のFDの学生から本校のFD活動について寄せられた感想としては、「教育学部だけでFD活動が行われていることから、他の学部も巻き込んでFD活動が行えたら良いということ」、「FDの構成メンバーとしては自主的に集まったものでないが、各教科に所属する学生が均等に集められている点は活動するときに効率が良い」「ソフトボール大会は各教科内や他教科の人たちと交流を深める良い機会だ」ということであった。

全体テーマの結論としては、やはりつまらないという意見や、つまらなくないという意見など様々な意見が出たが、それぞれが自身の大学について考える良い機会となったのではないかと感じた。実際に他大学の人たちと関わることで気づけた点も多く見つかった。しかし、その発見を実際に本校の活動に取り入れることができていないのが現状であるので、鹿児島大学教育学部学生FDの今後の課題としては、現在の骨組みを残しながらも、新

たな骨組みの付け加えと、FD以外の学生にも知ってもらえるような活動をする肉付けが必要であると思った。そうすることで、FD委員の本来の目的が達成されるのではないかと感じた。

第5章 学生FD委員会の活動

1. 学生FD委員会の概要

学生FD委員会は、本学部の授業や教育の改善のためのFD活動を担う学生主体の組織で、各専修から選出された2名の委員によって構成されている。具体的な活動としては、全国学生FDサミットへの参加や学部・大学院合同シンポジウムの企画・実施、ソフトボール大会の運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

今年度のFD委員会では、昨年度までの活動の反省を踏まえ、継続的な活動の土台を作り、来年以降に活動を繋げていくこと、また、活動を学部全体に広げて行くことを目標に掲げ、活動を行った。構成委員を、学生・教員間で授業について話し合う機会を設ける「FDシンポジウム班」、学生の履修登録などの支援をする「ピアサポート班」、ソフトボール大会を催す「ソフトボール班」の3班に分け、各班に班長1人と班員6～7人を割り振り、それぞれの活動に向けて準備を行った。(学生FD委員会委員長 久富祐)

2. 各班の活動と振り返り

(1) FDシンポジウム班

FDシンポジウム班では、まず、鹿児島大学教育学部における教育活動について、実際教育を受ける学生がどのように感じているのか、どのような点に不満を感じ改善してほしいと思っているのかを学生側から提案し、教員側と対等な立場で意見交換をすることにより解決を目指していくことをシンポジウムの開催目的として設定し、共有した。また、今年度のテーマ決定にあたっては、委員長を中心に話し合いを重ね、FD委員のシンポジウム班が中心となって行ったが、話し合いを重ねる中で、昨年のシンポジウムから何が変わったのか目に見えてわからないという疑問が上がった。昨年は、授業のカタチを考えるというテーマでディスカッションを行っているが、FD委員の中には、昨年と変わった様子がなく、授業に対する不満を持っている学生が多くいた。そのため、今回は授業をより良くするにはという大きなテーマに、「家庭学習時間の担保と単位数」というサブトピックを設けて、より具体的にディスカッションを進められるよう努めた。

実際のシンポジウムでは、グループディスカッションに際して、教員側と学生側双方の意見を聞き、対策内容が深められるよう、学生と教員の両方を含む4～5名を1グループとして実施した。また、ディスカッションの内容として、家庭学習時間と単位における問題とその対策をグループごとに挙げてもらうよう促した。

シンポジウムにおいては、まず、学生の家庭学習時間が短いことが問題として挙げられた。原因としては、課題を出す意図が学生に伝わっていないことが挙げられ、オリエンテーションやシラバスをより細かくして意図を伝える必要があるという結論に至った。また、学生のモチベーションを高める方法として、学習の成果をmanabaのポートフォリオで一元化することを取り入れてほしいという意見も出た。さらに、グループ課題における個々の負担の差についても、問題点として指摘された。この問題の対策としては、グループ課題には授業の中でおさめるようにすること、また、個人点と団体点を設け、グループ課題への貢献度を成績に反映することが挙げられた。

今回のシンポジウムでは、家庭学習時間と単位数に焦点を当てたディスカッションを行ったことで、前回よりも具体的な対策が挙げられ、改善につなげていきやすいと考えられた。一方、今回のシンポジウムの課題としては、シンポジウムに参加する学生や教員の人数が少なく、より多

くの人の意見を聞くことができなかつたことが挙げられる。シンポジウム開催の案内の方法などを工夫し、より多くの人にシンポジウムに参加してもらう必要があると感じた。(FD シンポジウム班班長 平山幸穂)

(2) ピアサポート班

ピアサポート班は8名体制で活動を行った。

具体的な活動としては、まず、学生 FD 委員会の活動の周知徹底を図るため、また、2020 年度前期にむけての活動を見据え、2019 年度後期の履修の際に履修日程の一覧表をプリントで作成し配布した。このときは 50 枚余りが利用された。

また、履修申請の科目選びについて、入学時のオリエンテーションで配布される『教育課程』の参考の仕方をよく理解できていない学生が多い現状に鑑みて、この冊子の読み方を解説するパンフレット『履修登録のすすめ』を作成した。このパンフレットは主に、学期が始まるまでの日程一覧、卒業するために必要な単位数や科目のジャンル（共通教育、専門科目など）別の注意事項、複数の免許取得の際の科目履修における注意事項を解説した。また、複数免許取得においては自分の専修領域以外の知識が不可欠であることから、各専修の3年生の学生 FD 委員を中心に一言アドバイスを掲載した。

このパンフレットは 2020 年 1 月末に完成した。70 部を作成して教務系の事務室に設置し、各専修の LINE で告知して自由に持ち帰れるようにしたところ、2 月第 1 週の時点で 10 部余りを残すのみとなった。人数制限のかかる科目のエントリー当日には増刷を見込んでいる。

自分たちの仕事が学生に役立つことで、委員各自が使命感を持てるようにこの結果はピア班で共有したい。特にシンポジウム後の会合では、委員の積極的な参加が見られ、パンフレット完成の達成感も少なからず共有できた。今後の課題としては、一部不参加の委員も出たことと、『教育課程』の学年をまたいだ検討が不十分だったことが挙げられる。活動開始時に具体的な見通しを共有することと、余裕を持った計画を練ることで改善を期する。(ピアサポート班班長 長田慎治)

(3) ソフトボール班

ソフトボール班は8名体制で、学祭期間中に開催するソフトボール大会の企画・運営を行った。

具体的な活動内容は、事前準備（告知案内の作成、グラウンド・道具等の予約、参加申し込みの受付、参加チーム確定後の日程、トーナメント作り、当日の仕事シフトの作成、参加賞・景品の準備）と当日準備（会場設営、グラウンド作り、後片付け）である。下記のスケジュールで準備をすすめた。

9 月中 グラウンド・道具の予約（グラウンド予約は教育学部学生係、道具予約は共通教育 1 号館の学生係）*なるべく早めに

10 月第 1 週 大会の告知（文書を作成し、各専修の委員が専修全体に共有）

10 月第 2 週 参加申し込み受付（今年度の参加費は 1 チーム 2,000 円）

10 月第 3 週 参加チームトーナメント抽選

10 月第 4 週～11 月第 1 週 当日の日程表、トーナメント表、仕事のシフト作り

11 月第 2 週～当日 参加賞・景品の準備、当日の机や椅子の準備

【2019年度 ソフトボール大会 大会概要】

- ・参加チーム：9チーム（専修）
- ・大会方式：予選リーグAパート（4チーム）、Bパート（5チーム）を行い、各パート2チームが決勝トーナメントに進出
- ・試合時間：1試合45分
- ・ルール等：(1) 投球は基本下投げ（スローピッチング）で行う。ただし、双方の合意があった場合にのみウインドミル投法も可能。
(2) 女子学生が試合に出場した場合、その人数×1点が点数に加点される。
- ・景品：商品券（1位7,000円、2位5,000円、3位3,000円）、参加賞500mlお茶1本

8人の班員だけで事前準備は行うことは可能であるが、当日の運営を行うことは厳しいところがあるため、FD委員会全体の協力を得ながら、当日の運営を行うことができた。今年度のソフトボール大会は、雨のため午前中の予選リーグまでの開催となってしまったが、その中でも他専修、他学年との交流を深める活動となったと思う。しかし、大会には女子学生が多くを占める専修の参加はなく、参加している専修もほとんどが男子学生である。学生同士の親睦を深めることを目的とした活動であるならば、すべての専修が参加しやすい、男女ともに楽しめる競技の実施を来年度に向けて、検討していくことが今後の課題である。（ソフトボール班班長 宇藤山暢）

3. 今年度の成果と今後の課題

この1年間を通して、初等・中等の領域ごとに履修登録の雛形を作成することができた。またFDシンポジウムでは、学生・教員間のそれぞれの授業観や、そのズレを話し合い、どちらともそれぞれへの要望や、改善すべき点が見えてきた。

一方で、この教育学部学生FD委員会という組織は、自主的に集まって行われるサークル活動の一環である他大学とは形態が異なり、各領域から数名が選出され、構成されているため、他大学よりも自主性・主体性が少なく、活動的でない組織になってしまうことが多い。また、学生FD委員会の活動や存在そのものが学生に知られていないことも多い。したがって、今後のこの組織の展望として、我々の作成した履修等のパンフレットをより広く活用したり、多くの学生が参加できる活動を企画したり、また教育学部全体を巻き込み、学生にとっても、教員にとってもより良い大学生活を送ることができるための支援をできる組織になるような活動を継続したいと考えている。（学生FD委員会委員長 久富祐）

1章 令和元年度教育学研究科教育改善のための調査

1. はじめに

これまで教育学研究科では、毎年大学院生を対象として、教育改善のための資料を集めることを目的としてアンケート調査を実施してきた。本年度は、教育学研究科の2専攻のうち教育実践総合専攻において教育改善を行うための調査を実施した。本章では、アンケート調査の結果の報告と考察を行う。

2. 調査の実施方法

令和元年度の教育改善のための調査を以下の方法で実施した。

- 調査実施時期 2019年12月3日から27日
- 教育実践総合専攻1・2年次生
- 調査実施方法 Web回答方式（匿名）
- 通知方法 教務係よりメール配信
- 質問項目 平成30年度の調査項目に準ずる質問内容

通知方法については、上記の他に大学院共通科目担当者に依頼し、授業中にアンケートに回答するよう周知してもらった。その結果、1年次生7名、2年次生6名の合計13名から回答が得られた。前年度の回答者は10名だったので、回答者数は前年度より若干改善が見られた。

3. 結果と考察

(1) 研究科、教育実践総合専攻、学修コース共通科目について

研究科共通科目、教育実践総合専攻共通科目、学修コース共通科目について、満足している点と改善してほしい点に関する意見は以下の通りであった。

●満足している点

- 自分のテーマ以外の、教育学のことが学べる。
- 他の専攻の院生と学び合う時間は貴重な経験となった。
- 様々な分野で研究している先生方の講義を受け、自分の分野での教育に関する共通点などを見出し参考にすることができた。また、グループ活動が多く、同世代の意見を聞くことができ刺激になった。
- 他専攻の学生と様々な意見交換ができる点。
- 遅い時間の授業にも関わらず、いつもきちんと教えてくださるので、満足しております。
- 何人かの先生が教えているので、様々な分野に触れることができ良いと思います。
- 実践的な内容や、専門性の高い内容についての学習ができている。
- グループ討議ができる。
- 他コースの学生と一緒になので、学びが深まる気がする。
- ディスカッションをする授業が多く、人の考えに触れて刺激をもらうことができるから。

- 専門性が高く、現場で活かせるような内容を詳しく学べる。

●改善してほしい点

- 複数の先生で1つの授業を持っている。そのため、それぞれの学びの内容が深くならないものもある。先生が計画的に講義してくださる場合には、3回ほどの時間でも充実している。
- 19時からの時間で授業を行わないでほしい。
- まだ時間数を増やしてもいいと思う。
- 1年では週1回あるが、2年以降もあってよい。
- 夜ある講義は、体力的、精神的にきつい。
- 6限目の授業は、社会人を対象にした夜間授業であるが、(それに該当する方がいらっしゃらない場合は)、授業時間を繰り上げて(5時間目とかに)行うことはできないだろうか。その年の入学者の編成に合わせて弾力的に時間割を組む方法はないだろうか。
- 授業3、4回ごとに先生が変わる授業があり、いろいろな分野のことは学べるが深く学ぶことができない。

研究科共通科目、教育実践総合専攻共通科目、学修コース共通科目について大学院生が満足している点は、専門分野を横断して学ぶことができることであると考えられる。しかし、専門分野を横断した講義であるため、一つ一つの内容を深く学ぶことができないという不満にもつながっている。また、開講時間に関する不満も挙げられている。これは社会人大学院生の受講を考えるとやむを得ない部分であり、時間割の編成時期などを考慮すると改善するのは現状難しいと考えられる。

(2) 学修コース専門科目について

学修コース専門科目について、満足している点と改善してほしい点に関する意見は以下の通りであった。

●満足している点

- 自分が求める学びを深めることが出来た。
- 他分野との共通点を見出し、自分の分野に関することの視野が広がった。
- いつも丁寧にご指導いただいています。
- 本の内容を章分けて、個人担当後でグループ相談のやり方で、いいと思います。
- 学部生の頃には学べなかった専門的な知識や先行研究なども学ぶことができています。
- 自分の知りたいことをより深く学べる。
- 専門を学べるので良い。
- 教職を中心とはしているが、自分の分野に近いことを学べる点。
- 専門性が高く、現場で生かせるような内容を詳しく学べる。

●改善してほしい点

- 学修コースは同じでも専門分野が異なる学生が集まって授業を受ける。専門外の学生は、ほぼ素人であるため、各内容が浅いものになりがちだと感じる。
- どの分野の先生方も、全ての分野に共通することを考えて講義して下さっていたが、他分野のことを聞けるせっかくの機会なので、専門的な話も聞きたかった。
- 学会等、出張で休講になるのはやむを得ないと思いますが、個人的な都合や仕事で複数回休講になってしまったのは残念でした。
- 本の内容が理解しにくい時があります。
- 鹿大以外から来た院生には、もう少し丁寧にしてほしい。
- レベルが高すぎるあまり、半分は理解できない科目がある。

学修コース専門科目について大学院生が満足している点は、その授業内容の専門性にある。一方で、改善してほしい点は、その専門性故に内容が高度すぎる場合があることである。この点は、受講生の予備知識やこれまでの学習状況を考慮に入れて授業計画を柔軟に行うことで改善できるのではないかと考えられる。

(3) 研究・学習環境について

研究・学習環境（設備・備品・消耗品など）について、満足している点と改善してほしい点は以下の通りであった。

●満足している点

- 学内のパソコンが使える。ヘッドホンなども整っている。
- 院生用の研究室がありがたかった。
- 今の環境で十分です。
- 研究室などの個人場所がいい。
- 使いやすい教室などが多くて勉強に集中しやすい。
- 機器の数が多。
- 院生が使える部屋がある点。
- さまざまな実験を行うことが出来る施設がある。

●改善してほしい点

- 専修ごとに、院生が使えるプリンターが欲しい。図書館などで印刷するので、コピー代がかさんでしまう。
- 院生室が狭い。
- 印刷機の使うことなど。
- プレハブの建物が遠いし寒い。
- 壊れて使用不可の機器が多い。修理してほしい。使用可能な物と混在させないで、定期的に点検してほしい。
- 文系研究棟の水道やトイレを綺麗にしてほしい。
- 必要な設備や備品、消耗品等が足りず、研究が進まない。

研究・学習環境については、院生用の研究室がある点や研究・学習用の機器が揃っている点を評価する意見が寄せられている。一方で、研究室が狭いこと、コピー機、プリンターが足りないことに関する不満の声が寄せられた。これらの不満点を改善することは、昨今の予算状況を考えると難しいかもしれないが、検討の余地はあると思われる。

（４）研究成果の発表についての感想・意見

アンケート調査時点では、すでに口頭発表を行ったものが４名おり、さらに４名がこれから行う予定であると回答していた。また論文執筆については５名がすでに執筆を行っており、その他の回答もすべてこれから行う予定であると回答していた。研究成果の発表（口頭発表/論文執筆/作品・演奏・競技等）について大学院生から寄せられた意見などは以下の通りであった。作品・演奏・競技等に関する意見は「特になし」のみだったので記載していない。

●研究成果の発表に関する指導・支援に関して満足している点

口頭発表

- 研究成果の発表については学会の入会金、会費、参加費全て全額自己負担で負担は大きかったが、その分あるものが大きかった。
- とても丁寧にご指導いただいています。本当にありがとうございます。
- 先生は個人考えを尊重してくれて細かいところを見てくれるので、ありがとうございます。
- ゼミなどで、細かい点まで指導していただいておりますありがとうございます。
- 専門性の高い教員に教わっている。
- 先の進路を見据えて指導してくれる気がする。
- 納得するまで細かく指導をしてくれる点。
- 教員が親身になって、対応してくれる。

論文執筆

- 指導教官に何度も指導していただき投稿することができた。
- とても丁寧にご指導いただいています。本当にありがとうございます。
- 先生は論文の進め方をアドバイスしてくれました。
- やや厳しめにしてくれるところは、良い。
- 論文の書き方を学べる点。
- 先輩のアドバイスが役に立っている。

●研究成果の発表に関する指導・支援について改善してほしい点

口頭発表

- 研究成果の発表に関する講義がない。そのため、担当教官によって指導や支援の頻度・充実度にかなり差がある。
- 現職でなければ、希望する学会全てに参加することは経済的に難しいと思う。
- 研究発表のイベント、他人のアドバイスをもらうことができたらいいと思います。
- 日頃のゼミ時間を増やしてほしい。もっと議論したい。
- ゼミを月２くらいでもいいので、しっかりと行ってほしい。

論文執筆

- 熱心に指導していただけないと感じることがある。論文執筆のための授業がなく、授業時間外での指導になることも要因かと考えている。
- 研究紀要は大学院生は第一筆者となれないため、研究実績として外部に提出するときに不利だと感じた。
- ゼミで議論する時間を増やしてほしい。
- 詳しく、どこがどのように駄目かを伝えた上でアドバイスしてほしい。

大学院生から寄せられた意見を見る限り、研究発表にまつわる点においては指導教員によって、満足かそうでないかが大きく異なるようである。専攻全体で対応できそうなものとしては、学会参加への経済的援助と研究成果の発表方法に関する講義を要望する声があげられている。研究発表に関する授業は様々な分野が混在する当専攻の性質上難しいかもしれないが、ある程度分野をまとめて行えば対応できる可能性はあるのではないかと考えられる。

(5) その他大学院での学習や生活全般について

今までの質問内容以外で、大学院生から寄せられた感想、意見は以下のとおりであった。

- 指導教官によって、できることに差があるように感じる。どの学生も同じように研究成果の発表や論文指導などが受けられるようにしてほしい。
- 長期履修生制度で仕事を続けながら大学院で学ぶことができたのでとてもありがたかった。
- 他学年の院生とも授業を受けてみたい。バチバチに論議したい。
- 証明書発行機の故障が多くて大変困る。
- 校舎の改修工事の粉塵が多いときがあるので、散水などの対策をしてほしい。
- 喫煙所がなくなったことにより、大学周辺のポイ捨てが増えている気がする。
- 院生研究室よりも人数的にゆとりがあり、落ち着いて研究を進めることのできる部屋が欲しい。

4. おわりに

このアンケート調査を通して、本専攻の大学院生にとって良い点と改善を要する点を明らかにすることができた。改善すべき点としてあげられたものの中には、教員側の意識を少し変えるだけで修正できるものも含まれているので、これらの意見にはある程度対応できるのではないかと考えられる。研究室や設備といった環境面に関することは直ちに対応することが難しいかもしれないが、ある程度対応を検討すべきであろう。

昨年度に引き続き、今年度も Web 回答方式でアンケートを行った。教務係からのメール配信に加えて、共通科目担当の先生方にアンケートへの回答を呼びかけていただいたが、それほど回答数に改善は見られなかった。来年度以降にもしこのアンケートを行うのであれば、実施方法、実施期間、周知の方法などの見直しが必要ではないかと思われる。

教育改善アンケート

令和元年度教育研究科教育実践総合専攻の大学院生を対象にしたアンケートです。
このアンケートへの回答は、無記名で行い、個人が特定されることは一切ありません。

*必須

回答期限：令和元年12月27日（金）17時

0. あなたの学年を教えてください。

学年

- 1年
 2年以上

1. 「教育実践総合専攻共通科目」「学修コース共通科目」の授業について、あなたの考えを教えてください。

満足している点とその理由

回答を入力

改善してほしい点とその理由

回答を入力

2. 「学修コース専門科目」の授業について、あなたの考えを教えてください。

満足している点とその理由

回答を入力

改善してほしい点とその理由

回答を入力

3. 研究・学習環境（設備・備品・消耗品等）について、あなたの考えを教えてください。

満足している点とその理由

回答を入力

改善してほしい点とその理由

回答を入力

4. 研究成果の発表について、あなたの考えを教えてください。
(ただし、修士論文発表会を除きます。)

(1) 口頭発表*

- すでに行った
 これから行う予定である
 予定はない

研究成果の発表にかかる指導や支援で満足している点とその理由

回答を入力

研究成果の発表にかかる指導や支援で改善してほしい点とその理由

回答を入力

(2) 論文執筆 *

- すでに行った
- これから行う予定である
- 予定はない

論文執筆にかかる指導や支援で満足している点とその理由

回答を入力

論文執筆にかかる指導や支援で改善してほしい点とその理由

回答を入力

(3) 作品・演奏・競技等 *

- すでに行った
- これから行う予定である
- 予定はない
- 該当しない

作品・演奏・競技等にかかる指導や支援で満足している点とその理由

回答を入力

作品・演奏・競技等にかかる指導や支援で改善してほしい点とその理由

回答を入力

5. その他大学院での学習や生活全般について

ご意見・ご要望があれば、自由にお書きください。

回答を入力

ご協力ありがとうございました。
教育学研究科教育改善委員会

送信

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。 [不正行為の報告](#)・[利用規約](#)・[プライバシーポリシー](#)

編集後記

委員長として全体のとりまとめ、進行、また全学FD委員会関連業務を担当しました。最も印象に残っていることは、本報告書の冒頭でも少し記しましたが、全学が求める学部教育改善委員会の役割の重要性と対する学部教員全体としての意識の乖離です。全学から学部への情報伝達は委員長の役目ですが、この点不十分だったと反省しています。しかしながら、学部全体としてFD活動が活発だとは思えない状況ではありますが、教育学部生の学部に対する満足度、例えば「大学での経験全般」についての満足度は、学内で最も高い評価を得ています。この結果は学部教員個々の教育に対する意識が高いのだろうと励みになりましたし、そしてそれを強みとして高めていきたいとも思っております。このような学生評価は、今後ますます目に触れることになると思われませんが、より高いレベルを目指して教育改善活動が実質的に成果をあげられることを祈りつつ、次年度以降は一教員として下支えしていきたいと思えます。（浅野）

教育改善委員として、学ぶことの多い2年間でした。中でも、学部・大学院合同FDシンポジウムに参加して、学生の授業、学びに対する熱い思いに直に触れたことは、授業改善に向けた何よりも強い動機づけになりました。今後も、学生、教職員一丸となってより良い教育学部、より良い授業について考えていければと思います。（島）

今年度、教育改善委員会の委員として活動させて頂いたことで、多くの事を学ばせて頂きました。何年か前までは「FD」と言えば、「フロッピーディスク」でしたが、学生さん達はその現物すら見たことがない世代であると思います。ものすごいスピードで現代社会が進化していることの証であると思います。今まで教員が受けてきた教育とこれから必要とされる教育は、同じものではないはずです。教員も常にリニューアルすることが重要である事を肝に銘じていくべきだと思いました。また、今年度の教育改善委員会では、授業アンケートを担当させて頂きました。その中で特に重要だと感じたことは、質問項目13の自由記述です。一部抜粋を本文中に記載しましたが、学生の率直な意見がたくさん書かれていました。今後はこの自由記述の回答をしっかりと分析し授業改善に向けて対策を取ることが重要だと思います。（宮脇）

今年度は、学生FD委員と共に、教育学部・教育実践総合専攻合同FDシンポジウムの企画・運営を担当しました。シンポジウムは、参加者が少ないながらも、とても充実した議論がなされました。今後は、教員・学生ともに、より広く参加者を募ることが課題となります。また、学生FD委員会としても、ピアサポート活動や要望書の取りまとめなど、年間を通して活発に活動を行うことができました。今後は、学生がより自由で主体的な活動を企画できるような体制を整えていくことが必要になるかと思えます。（石原）

自己評価委員会からの出向として、教育改善委員会委員を経験させていただきました。委員としては、石原先生が担当された教育学部 FD シンポジウムの補佐をさせていただきました。学部 FD シンポジウムにおいては、学生にとり、教員にとり、よい授業とはどんな授業かについて、同じ班になった丹羽先生や教育学部学生 FD 委員会委員の方々と本音で話し合う貴重な経験をすることができました。

学生たちが興味を持つ授業を行うことは、私にとりましてはライフワークと言っても過言ではない目標であり、課題でもあります。どうすれば授業内容に対して初めて受ける方々に少しでも興味を持って貰えるのか、少しでも分かり易い授業を行うためにはどうすれば良いのか、今でも思い悩んでいる問題です。授業アンケートの結果や他の先生方の授業参観（前期は何とか参観できましたが、後期は種々の事情により参観できませんでした。本当に申し訳ありません）等からヒントを得て、授業改善を考えているところです。定年退職するまでに一度でも良いので、受講生たちに興味を持たせる授業をしてみたいと強く思っています。教育改善委員会で行っていることは、教師としての自己研鑽の行為です。私は、学生たちに興味を持たせる授業を直ぐに行うことは無理でも、自己研鑽行為だけは継続していきたいと考えています。（日隈）

今年度は、大学院担当の委員として、大学院生への教育改善アンケートを担当しました。アンケート回答率を上げるために少しだけ工夫したのですが、少しだけ回答率が上がったという結果になりました。毎年少しずつ工夫を積み重ねていけば徐々に回答率も上がると思うのですが、残念ながら教育実践総合専攻は来年度入学生で最後になりますので、このアンケート調査も最大限続けたとしても残り数回です。回答率はあまり高くないのですが、大学院生の皆様からは貴重なご意見をいただきました。今回の調査結果が教育改善の一助になれば幸いです。（有家）